

碧い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

特集

見直そうノ

地域伝統芸能

67

2009 November

青い海と緑の山々に恵まれた中国地域に、地域づくりの風が吹き始めています。自分たちの大好きなこの街を少しでも良くし、子どもたちにしっかりと手渡したい。こんな気持ちで頑張っている人たちがいっぱいいます。「碧い風」は、そんなまちづくり人を結びながら、自分たちのまわりにある魅力を高め、きらめくような中国地域にしていく媒体にしていきたいと思っています。強くはないが、楽しい風。そんな風を、みなさんと一緒に巻き起こしたいと考えています。

碧い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

67

2009 November

contents

- 3 **視点** 民俗芸能の原点と課題 民俗芸能学会代表理事 山路興造
- 4 地域づくりを高める地域伝統芸能 安島博幸
- 6 地域に元気をもたらす**困幡の傘踊り** (鳥取市)
- 8 絶えることなく地域で受け継がれている**鷺舞** (鳥根県津和野町)
- 9 神楽文化を発信する**神楽門前湯治村** (広島県安芸高田市)
- 10 ふるさとの誇りを次世代に伝え続ける**白石踊り** (岡山県笠岡市)
- 12 ユネスコ無形文化遺産候補に選定された**壬生の花田植え** (広島県北広島町)
- 14 海峡の悲哀の歴史を受け継ぐ**先帝祭** (山口県下関市)
- 15 「若者たちの地域づくり」**限界集落で持続可能な地域運営に挑む「ちいき活勢会」** (広島県庄原市)
- 16 「地域に生きる企業家群像」**コアテック株式会社 社長 須増仁志** (岡山県総社市)
- 20 「産学官連携最前線」**血液透析患者さんの負担を軽減する尿素モーター** (岡山県)
- 22 「キラリ、輝く元気企業」**新しいビジネスモデルでハンドバッグ市場を開拓するパルコス** (鳥取県倉吉市)
- 24 「夢紡人/ゆめつむぎびと」**おいしい米を多くの人に届けたい。その理想を仲間とともに追い求める 高橋功一さん** (鳥根県浜田市)
- 27 「佳味彩々」**かもち** (山口県周防大島町)
- 28 「藩ものがたり」**福山藩** (広島県福山市)
- 30 「庭園道通」**宗隣寺庭園** (山口県宇部市)
- 32 「国宝の旅」**向上寺三重塔** (広島県尾道市)



表紙写真：山口県下関市の「先帝祭」 写真提供：下関市
目次写真提供：宮崎県高千穂町、鳥根県津和野町、天野正、下関市
表紙デザイン：久原 大樹 (広島市在住)

*本誌は再生紙を使用しています。

地域伝統芸能

視点 民俗芸能の 原点と課題

民俗芸能学会代表理事 山路興造

全国各地に伝わる民俗芸能は祭りや年中行事などのハレ(非日常)の日の芸能として生まれてきた。毎日朝早くから夜遅くまで農作業などに追われていた人々は、年に数日のハレの日にはケ(日常)の仕事から解放され、ケの日に

は口にできない赤飯やもち、酒などを飲食して楽しんだ。その日に行われたのが民俗芸能である。それを演じるのは主に若者組であった。若者組は、いずれ戸主となる長男で構成され、若者宿という教育機関で地域

運営を学ぶとともに、地域に伝わる民俗芸能を継承してきた。その民俗芸能を地域の人たちに披露するのがハレの祭りの場であり、地域の人たちはそれを見て楽しむと同時に、若者の技量を判断した。つまり、民俗芸能は地元の人たちに見せる目的で演じられてきたのである。

その一方で、芸能そのものは時代とともに変わることと原則あるいは本質とされている。その時代の人たちが面白いと感じたものを取り入れることで、芸能は受け継がれてきたのである。従って、ハレの日の民俗芸能でも常に新しい要素を取り入れながら継承されてきた。

そうした民俗芸能に大きなインパクトを与えたのが戦後の文化財保護制度である。時代とともに変化し続ける民俗芸能を保護・保存するという文化財保護制度は民俗芸能の本質とは相いれないことであった。そこで打ち出されたのが保存と活用であり、それを契機に民俗芸能を活用して地域づくりを進めようという動きが全国で活発化してきた。

確かに、芸能の本質からすれば多くの観客が喜ぶように変容させることもやむを得ないといえるが、その一方で民俗芸能が受け継いできた「原点」を見失ってはならない。いかに華やかな神楽

を舞っていても、神楽の意味をきちんと理解することは不可欠である。その意味では、保存と活用という二面性をどう維持するかが問われているといえる。

また、民俗芸能にとって後継者の育成も大きな課題である。明治以降の急速な近代化によって学校教育において西洋音階が導入され、伝統的な日本音階の土壌は急速に消失していった。それとともに、民俗芸能に対する若者たちの違和感も拡大していった。子守歌や神楽などで培われてきた民俗芸能の「遣伝子」が希薄になってきたのだ。

しかし、中国地域のように幼いころから神楽のリズムで育った子どもたちがしっかりと神楽を継承している地域もある。また、東北地域のように学校教育の場に地元の民俗芸能の伝承者を招いて民俗芸能を教えているケースもある。さらに、鳥根県のように、きちんと民俗芸能を保持している人を保持者と認定する制度を導入している取り組みもある。

民俗芸能は人々が楽しめるものなればならないから、時代や地域によって変化するのは当然としても、民俗芸能の原点はしっかりと堅持すべきであるし、そこそが地域伝統芸能の本質であるといえる。



profile

山路興造 やまじこうぞう

1939年東京都生まれ。民俗芸能学会代表理事、民俗学者、藝能史研究者。大学を卒業後、国立文化財研究所研究員、京都市歴史資料館館長など、一貫して民俗芸能の研究に携わる。

地域づくりを高める地域伝統芸能

安島博幸

地域伝統芸能は地域にとって大切なものであるが、それをきっかけとして地域全体を見直し、再評価することも求められている。その意味で、地域伝統芸能は地域の魅力を高める重要な地域資源といえる。

地域資源は地域づくりの大切なポイント

地域づくりやまちづくりにおいて大きな役割を果たすのは地域資源である。全国どこにもある商品やサービスでも味わ

える料理ではなく、地域ならではの商品や料理はその地域の大きな魅力であるし、それによって多くの観光客を誘客することもできる。ある意味では、その地域ならではの地域資源を発掘し、それをどう生かすか、その魅力をいかに

高めるかが地域づくり、まちづくりのポイントとなっている。

全国各地では観光地づくりや特産品開発などに向けた取り組みが本格化しているが、その多くが大規模な観光施設などを整備する方向ではない。むしろ、伝統的な文化や食、行事などを生かした取り組みにシフトしている。これも地域資源への評価が高まっていることを示している。その意味で地方はその地域性を急速に高めているといえる。

地域資源を生かす場合に重要なのは「本物」であることだ。例えば、インターネットを利用すれば、サイト上で世界各地の「旅行」を楽しむことも不可能ではない。それでも、毎年多くの人がちが各地を旅しているのは、その場所しかない価値、さらにはその価値をはぐくんできた地域空間を体験できるか



多くの観光客が観賞する夜神楽

なつた。その時、他の地区の人たちはわざわざ舞い手を派遣して、その地区の神楽を支援した。町の人たちにとって、神楽は地域の誇りであり、「コミュニティ」を維持する「核」でもあるのだ。高千穂の神楽にはそれほどの重み、言い換えれば、「本物」がある。

神楽をきっかけに

地元を学ぶ意識が高まる

しかし、高千穂の夜神楽は地域伝統芸能だけにとどまらなかつた。夜神楽をきっかけに「地元学」への機運が高まってきたのだ。地元学とは、地元の人たちが暮らした文化、資源などを見つめ直し、それを大切に育てながら地域らしさを追求していくことだ。

そうした地元学の成果の一つとして郷土食の見直しが見られる。高千穂



夜神楽が上演される神楽殿

備されることも多いが、そこには地元の人たちや地元ゆかりの人たちと一緒に祭りや伝統芸能を楽しみたいという思いがあるようだ。それがまた、地域の魅力となっていくのである。

地域やコミュニティを支える原点の一つ

こうした祭りや伝統芸能は観光だけでなく、地域やコミュニティを支える「原

点」の一つともなっている。その一例として紹介したいのが宮崎県高千穂町である。高千穂町は九州山地のほぼ中央に位置し、天岩戸開きなどの神話の町としても知られている。特に、町の観光の目玉となっているのが高千穂の夜神楽である。高千穂の神楽は、天照大御神が天岩戸に隠れた時、岩戸の前で天細女命が舞ったのが始まりと伝えられるものである。

この地域には古くから伝承され、秋の収穫への感謝と翌年の豊稔を祈願して、毎年十一月末から翌年一月上旬にかけて、地区ごとに、神楽宿と呼ばれる普通の民家で奉納される。夜神楽には三十三の番付があり、神様を神楽宿に迎えた夕方から始まり翌日の昼前まで舞い続けられる。

しかし、人口流出が進む中で、ある地区では舞い手が一人だけになつてしまいい、神楽の中止も検討せざるを得なく



「地元学」で着目された小昼の一例

らだ。その意味で、本物であることは非常に大きな意味を持っている。

地元の人と一緒に楽しむ地域伝統芸能

地域資源は多種多様であるが、とりわけ祭りや伝統芸能は有力な地域資源であり、観光においても大きな力を発揮している。確かに、多くの伝統芸能は神事的色彩が強いが、それは決して「観客」を否定するものではない。もともとは限られた空間と限られた人間によって営まれるものであっても、それを多くの人たちの前で演じることにによって張り合いが生まれ、その結果として継続されてきたのである。その意味で、伝統芸能においても「観客」の果たす役割は大きいといえる。

また、観光客にとっても伝統芸能は大きな魅力であるし、楽しさでもある。自分の日常生活にはない珍しいものというところもあるが、地元の人たちと祭りや伝統芸能の「場」を共有することによって、これまでにない満足感を得、自分の中に蓄積されてきたエネルギーを爆発させているのだ。

各地の祭りでは、家族だけでなく訪れる人のために「振る舞い料理」が準備されている。これは決して観光客を対象にして開発したものではない。夜神楽という地域資源を大切にすることで、もつと地域を知ろう、地域を探検しようという意識が高まってきた成果である。

地域伝統芸能は地域にとって大切なものであり、保存・継承すべきものである。しかし、それだけにとどまらず、地域伝統芸能をきっかけとして地域全体を見直し、再評価することも求められている。

その意味で、地域伝統芸能は地域の魅力を構成するだけでなく、魅力を高める重要な地域資源といえる。

profile

安島博幸 やすしほ・ひろゆき

1950年東京都生まれ。立教大学観光学部教授、工学博士。大学を卒業後、シンクタンク研究員、東京工業大学助手、金沢工業大学教授などを経て、現職。日本観光研究学会会長、日本都市計画学会評議員なども務めている。主な著書に、『観光学入門』『アメニティ都市への途』などがある。

地域に元気をもたらす 因幡の傘踊り

《鳥取市》

地域の「危機」を救うために考案された傘踊りは、地域伝統芸能として高く評価されるとともに、先人たちの偉功をたたえるかのように、地域の人たちの手で保存・継承されている。



勇壮に傘を振り回す因幡の傘踊り

勇壮で激しく傘を
打ち振る傘踊り

なんの いんがでー ハイッ ハイッ
カワイヤーノー カワイヤーノー
かいらー こぎなるうたー ハイッ

因幡三山の峰々に、静寂を打ち消すかのようなぶしの利いたなじみの歌声が響く。全国的にも知られ、鳥取県を代表する民俗芸能の因幡の傘踊りの序奏である。

毎年、初秋になると鳥取市国府町の因幡万葉歴史館の一角にじつらえられた伝承館のステージで、「因幡の傘踊りの祭典」が繰り広げられる。屋根は八角形の傘でかたどられ、長柄の支柱という凝った舞台である。県内はもとより兵庫県からも参加し、老若男女の二十団体が勇壮華麗な踊りを披露する。

庄巻は、傘踊り創始の明治中期から受け継がれている、長柄の傘を剣舞のように打ち振る踊りである。傘には百個の鈴がつけられ、赤、白、青、金、銀などであでやかに飾られている。傘は直径百六十一センチ、柄の長さは百六十七センチ、重さは三キロもある。踊り手はそろいの浴衣に手甲、脚半、白鉢巻き、白たすきの凛々しい姿で、

やがて近郷近在だけでなく、鳥取県の東部一円まで一気に広まっていたが、大正初期まで公の場で踊られることはなかったという。

傘踊りは一生忘れられない
心の財産

因幡の傘踊りが最も盛んだったのは昭和初期で、農村振興盆踊り大会に出演して多くの観客を熱狂させたという。その後十年ほどは踊られたが、第二次世界大戦でまたもや途絶えた。

そして、戦後の一九四八（昭和二十三）年に因幡の傘踊りは復活した。十一月に昭和天皇が山陰地域を幸し、三朝の国立療養所を慰問された時には天覧の栄に浴したのである。次いで、二年後の第一回全国郷土芸能大会にも出場を果たし、因幡の傘踊りは県の観光宣伝に欠かすことのできない踊りとなった。

さらに、一九七〇（昭和四十五）年に、大阪で開催された日本万国博覧会への出場を契機に有志六十人で「国府町因幡の傘踊り保存会」が結成され、一九七四（昭和四十九）年には鳥取県無形民俗文化財にも指定された。

その一方で、保存会は会員による練習を重ねるとともに、町内の小中学生への普及にも努めている。自ら中学生の

歌に合わせて傘を操り、リズムカルに舞う。勇壮に激しく傘を振り回すさまは、踊るといふよりも、競技である。

天に向かって勢いよく突きあげる傘、地を力強くけて踏ん張る足、シャンシャンとテンポのよい鈴の音色は体全体に響き、そのすべてが見るものを勇気づけてくれる。

千ばつの危機を救った
老農夫の踊り

この勇壮な傘踊りは、いつごろ、どのようにして始まったのか。一般的には、次のように伝えられている。

江戸末期、鳥取県東部の因幡地方はかつてない干ばつとなり、田畑は割れ、作物も枯れ草状態となり、村人は天を仰いでひたすら雨を待ち焦がれていた。窮状をみかねた老農夫の五郎作は、冠がさを手にして三日三晩無我夢中で踊りまくった。

すると、祈願が天に通じたのが、三日目の夜半から大粒の雨が降り出し、飢餓を免れた。だが、悲しいことに五郎作は踊り疲れて病に伏し、帰らぬ人となった。

村人らはその年の盂蘭盆、広場に集まって、五郎作と同じように冠がさを振りかざして五郎作の霊を慰めたのである。

ころから踊っている保存会の田村一郎副会長は「子どものころに覚えた踊りや歌は、一生忘れない心の財産。故郷への記憶になりますから」と、笑顔を浮かべて語った。

いくども地域の「危機」を救った因幡の傘踊りは、先人たちの偉功をたたえるかのように、因幡の青空に傘を力強く舞わせている。

（文・中山昇治・鳥取市在住）

退廃の危機から生まれた
傘踊りの原形

五郎作が実在の人物であるかは不明だが、現在の因幡の傘踊りの礎を築いた山本徳次郎翁の偉業は語り継がれている。徳次郎は一八七九（明治十一）年、国府町清水の元の庄屋・山本清吉の次男として生まれ、三歳で親類にあたる大地主、山本梅三郎の養子となった。

長じて、村内の若者の中心的な存在となつて、「明るい村づくり、人づくり」に燃えていた矢先、若者たちの間ではくちが横行して一夜にして田畑を失うなど、村には退廃的気運が強まっていた。このことを心配した徳次郎は、何か健全な娯楽はないものかと考え、長柄の傘に振り回すことを考案した。踊

りは徳次郎が得意とする剣舞の型を取り入れたもので、いきおい勇壮活発な踊りになった。さらに、徳次郎は手先が器用だったので、傘の製作まで考えた。

一八九六（明治二十九）年、ついに傘踊りが仕上がり、徳次郎は村の青年を集めて自演した。小気味よい鈴の音色に合わせ、傘が縦横に舞った。因幡の傘踊りの始祖である。

青年たちは興奮し、我も我もと傘踊りに取り組むようになつた。しかし、徳次郎はけいこでは容赦しなかつた。青年の気骨を鍛えることあつて、気合が入らないものには怒鳴った。踊りを通して、「心技体」をたたき込んだのである。

練習は、田植えの後から盆のころまで、毎晩八時半から深夜まで繰り広げられた。それはたちまち村の活力ともなつた。



県内はもとより兵庫県からも参加する因幡の傘踊りの祭典

ふるさとの誇りを 次世代に伝え続ける白石踊り

《岡山県笠岡市》

十三種類もの異なる踊りが混然一体となつた白石踊り。この古式ゆかしい盆踊りをふるさとの誇りとして、次世代に伝え続けるために、人々は島を挙げて保存に取り組んでいる。

古い姿のままの
独自の盆踊り

岡山県西南部に位置し、西は広島県福山市と接する笠岡市。その沖合約十二キロメートル、二十余りの島々が連なる瀬戸内海笠岡諸島のほぼ中心に位置するのが白石島だ。面積約三平方キロメートル、周囲十キロメートル余り。遠くから島を見ると、露出した花ごつ岩が白い雪をかぶらしたように見えることから白石島と呼ばれるようになったといわれる。国の名勝にも指定されている風光明媚な島である。

そんな島に伝わる古式ゆかしい盆踊りが白石踊りである。一般的に盆踊りは単純素朴なものだが、白石踊りには男踊り、女踊り、娘踊り、奴踊りなど十三種類もの異なる踊りがあり、それ

「かつては島で唯一許された最大の娯楽だ」と思います。踊りを目指し一年かけて、音頭をとる者はどを鍛える、踊る者は女なら優しくきれいに、男なら勇壮活発に、それぞれ踊りを極める。それが結果的に十三種類もの踊りになったのではないかと考えられています。音頭は口説き、いわゆる口承によるものですし、極端に言えば一人ひとり踊りが違う。幼児から長老までみんながそれぞれに思い思いの踊り方で踊るのです」と天野さんは話す。

担い手不足の中で、
全島民で踊りを保存

江戸初期に始まって、今日まで三百年数十年前踊り継がれてきた白石踊り。最盛期は江戸時代中期の元禄時代といわれ、踊りの衣装なども当時を考証して作っているが、現在、保存に向けてどのような取り組みがなされているのか。

その中核を担うのが白石踊会だ。会といつても全島民六百七十人弱が所属している。島を挙げて保存に取り組み背景には、過疎や少子高齢化による担い手不足といった、離島のどこも抱える危機感がある。



瀬戸内海を背に繰り広げられる白石踊り

かつては、島のどの家でも祖父父母から子や孫へと自然に伝えられていた踊り。少子化が急速に進む島の現実を前に、昭和から平成への移行期に実施された「ふるさと創生事業」をきっかけとして、本格的な保存の取り組みが始まった。

まず、白石幼稚園、小・中学校での総合的な学習の時間などを活用して、年間十数時間踊りの指導を行う。現在、島の子どもたちは幼小中合わせて三十

四人。対する踊会の指導部員は六人で、七十代を中心に八十代のお年寄りもいる。「私はまだまだ下り端ですよ」と天野さんは笑う。

また、毎年六月からお盆まで毎週二回、踊会と公民館との共催で一般向けに練習を、さらに同じく週二回、文化庁の助成を受けて子ども向けの教室も開く。指導は基本的にマンツーマン形式だ。

これに比べ、子どもたちも自主的に白石踊りクラブを組織し、一昨年岡山県で開かれた全国生涯学習フェスティバルでは総合閉会式で堂々と踊りを披露した。

白石踊りは島そのものの、
ふるさとのすべて

もちろん、島外の人に向けても積極的にPR活動を展開する。毎年七月には出前白石踊体験会を笠岡市中心部で開催。七月から八月は島の海水浴場で白石踊鑑賞体験ツアーや観光白石踊と

らが一つの音頭と太鼓の伴奏に合わせて混然一体となつて踊る様は全国に類を見ないといわれる。また、二つした独自の盆踊りが古い姿のまま保存されているのはこの島だけともいわれ、一九七六（昭和五十一）年には国の重要無形民俗文化財にも指定されている。

島で唯一許された
最大の娯楽

古い言い伝えによると、白石踊りは、島の東岸に広がる水島灘で繰り広げられた源平水島合戦の戦死者の霊を慰めるために始まったという。島には縄文・弥生の時代から人が住んでいた形跡が見られるが、「歴史的な裏付けがあるのは、今の白石踊りが現在の島民の祖先、すなわち江戸初期に島の干拓のために笠岡や福山から渡ってきた人たちが瀬戸内の漁民たちによって形作られていったということだ」と話すのは、白石踊会理事で白石公民館長も務める天野正さんだ。

江戸時代、白石島は備後の鞆と備前の下津井を結ぶ内海沿岸航路の中継地として栄え、初期には福山藩主の水野氏によって干拓が行われたため、多くの人が島に渡ってきた。干拓地には治水機能を持つ遊水池が造られ、年に一

回、音頭をとる者が減っていく傾向に変わりはない。天野さんは「現役の子育て世代など若い人たちは自分たちのことで精一杯。結局元氣なお年寄りに頼らざるを得ない」と苦笑する。「それでも、白石踊りは島そのものの、ふるさとのすべてといつても過言ではありません。踊ることによってふるさとに誇りを持ち、次世代を担う人たちがいつか島に帰ってくるのではないかと期待を込めて、伝え続けていくしかありませんね」。

そう語る天野さんの目は、踊りを伝え続けることの誇りに輝いているようだった。

（文・鈴木富美子・岡山市在住）



江戸時代の絵巻に描かれた白石踊り



伝統芸能を受け継ぐ子どもたちの踊りの輪

ユネスコ無形文化遺産候補に 選定された壬生の花田植え

《広島県北広島町》

五穀豊穡を祈願して始まったとされる壬生の花田植え。稲作文化を象徴するともいえる伝統芸能の原点を見失うことなく、地元の人たちは地域を挙げて保存・継承している。



息の合った早乙女と囃子方の所作が花田植えの特徴

田んぼの水面に広がる 一大絵巻

六月の第一日曜日。中国自動車道千代田インターチェンジ近くの水田の周りには多くの人たちが埋め尽くされる。その人だかりの中では、きらびやかな装具を付けた牛（花牛）や早乙女、見事なバチさばきを見せる囃子方等が新緑の山や田んぼの水面にマッチして一大絵巻となっている。広島県北広島町壬生地に伝わる壬生の花田植えだ。

西日本では中世のころから、集落の人たちが組になって田植えをする際に、ささらを持ったサンバイ（田の守護神）の指揮で太鼓や笛、手打鉦ではやし、早乙女が歌を歌いながら田植えをする。田囃しという風習があった。それが特に盛んだったのは、北広島町や安芸高田市などの芸北地域である。

この地域で花田植えが始まったのは中世末期と推察されているが、古文書によると江戸時代中期から盛大に行われるようになったという。特に、大地主などの田植えとなると、花牛を十数頭、早乙女や囃子方などをそれぞれ五十人から六十人ほど集め、にぎやかに行われていたという。花牛はきらびやかな

花鞍で飾り立てられ、早乙女は緋の着物にすげがさ、赤色のたすき、紺色の手甲、脚半などで身を飾って参加した。その様子が美しいことから、花田植えと呼ばれるようになったという。

ユネスコの無形文化遺産 候補にも選定

花田植えとはいつても農作業である。それでも、何となく浮き浮きした華やいた雰囲気があるのは、花田植えが大規模な田植えであるだけでなく、田の守護神であるサンバイ神を迎えて五穀豊穡を祈願する祭りであるからだ。

農民は田植えが終わると、それを祝福し、サンバイ神に感謝して、老若男女が一カ所に集まり、飲んで、食べて、歌って、はやして、楽しく触れ合っていた。これをこの地域では「泥落し」と呼んでいた。

しかし、第二次世界大戦後の急速な工業化によって田植えの様子も一変した。家畜を使った手作業は耕運機やトラクタに移行し、のどかな牛の鳴き声や早乙女の歌声も聞かれなくなった。

そうした中で、芸北地域では地域の人たちによって花田植えが保存・継承されており、二〇〇九（平成二十一）年には特に規模の大きい壬生の花田植えがユネスコの無形文化遺産候補に選ば



花鞍で飾り立てられた花牛



多くの観光客に囲まれて繰り広げられる花田植え

れている。壬生の花田植えは太鼓打ちが大変多く、非常に豪華なことで知られ、一九七六（昭和五十一）年には県内で初めて国の重要無形民俗文化財に指定されている。

「花田植えは牛と早乙女、囃子方などで構成される田楽団によって行われており、壬生には現在、二つの団があります。その田楽団をサポートしているのが壬生の花田植保存会です」。こう語るのは保存会の藤本隆幸会長である。現在、壬生の花田植保存会は二十五人前後のメンバーで構成され、地元の人たちの協力を得て田楽団の活動を支えている。

美しい歌に合わせた 田植えの所作

花田植えは、牛追いが代かきという大きな鋤を引く花牛で田を耕し、全員で壬生神社に参拝してサンバイ神を迎えた後、早乙女とサンバイ、囃子方などが三位一体となって田植えをするものだ。

歌に合わせてそろえた所作の美しさが印象的である。

花田植えを開催するうえで重要なのは、花鞍を背負って晴々しく登場する花牛の確保である。そのために、保存会は開催の三ヶ月前には花牛を飼っている近郷の農家を訪ねて「出演交渉」を行う。かつては北広島町だけでも二十頭前後の花牛がいたが、現在は十頭前後にまで減少しているという。それでも花田植えへの「出演」を楽しみにしているらしく、花牛は春になるとそわそわしてくるという。

花牛を確保できると、五月からは早乙女や囃子方などによる練習がスタートする。各田楽団ともメンバーは八十人前後で、男女ともほぼ同数である。練習に時間を割くのは、歌に合わせた田植えの作業だ。美しく見せるためには、田植えの初めと終わりに「タツ」と顔を上げなければならぬのだが、それが難しいという。しかも、マニュアルがあるわけでもなく、先輩たちから口伝で教わったもので、練習の積み重ねが不可欠という。

「団員は比較的若い人が多く、花田植えを経験したという練習の時から参加する女子大生のグループも

います。その一方で、後継者育成という意味を込めて二十年以上前から子ども田楽団を結成しています。これは小学五年生を対象としたものですが、幼い時から花田植えのリズムを聴くことで、やがて花田植えを継承してくれればうれしいですね」と、藤本さんは笑顔で浮かべて語った。

原点を大切に 保存・継承したい

二〇〇九年のユネスコの無形文化遺産候補への選定もあって、今年の花田植えには約一万人の観光客が訪れた。それまで観光客は減り続けていたのだから、保存会にとっては大きな喜びだ。しかし、それでも藤本さんは壬生の花田植えを単なる芸能にはしたくないという。

「花田植えは、お田植え神事を行った後で、自分たちの手で苗を植え、豊穡を祈願するものです。つまり田んぼがなければ、何の意味もありません。この原点を忘れることなく、伝統芸能としてしっかり保存・継承していきたい」と、藤本さんは力強く語った。

中国山地に囲まれながら受け継がれてきた壬生の花田植えは、地域文化を大切にすることで多くの人たちの力を得て、その華やかさに、さらに磨きをかけようとしている。

海峡の悲哀の歴史を 受け継ぐ先帝祭

〈山口県下関市〉

身投げした帝の霊を慰めた
女官たち

本州最西端の山口県下関市は海峡都市である。潮風に吹かれながら岸壁に立てば、目の前にはレトロ都市として人気の高い福岡県北九州市門司の街並みが見える。間に広がるのは、日本の歴史において何度も重要な舞台となった関門海峡である。

その海峡の悲哀の歴史として語り継



観光客が見守る中、天橋を渡る太夫

がれているのは、壇ノ浦（関門海峡）の源平合戦で敗れ、わずか八歳で身投げした安徳天皇の悲話である。その霊を慰めるために、からくも生き延びて下関で生活していた平家の女官たちは、安徳帝の命日である三月二十四日（旧暦）には昔ながらに威儀を正して帝の御影堂に参拝し、香華を手向けたと伝えられている。

やがて江戸時代になって遊郭が出来る

と、郭の主人は女官たちの優しい真心と美風を後世まで伝えようと、遊郭の遊女たちに参拝を続けさせたという。これが先帝祭の起源とされている。江戸時代、下関は北前船の寄港地となったこともあって繁

栄し、関（下関）の先帝、小倉の祇園、雨が降らなげや金が降る」とうたわれたほど、先帝祭もにぎわったという。その後、時代の変革とともに移り変わりながら、現在では「しものせき海峡まつり」の一環として毎年五月三日に開催されている。

悲しみを秘めた
豪華絢爛な祭り

先帝祭は上臈道中と上臈参拝で構成される。上臈道中は、地元の漁師が帝の亡きがらを網で揚げた伊崎町から赤間神宮まで、豪華絢爛な衣装をまとった五人の太夫が、それぞれ稚児・警固・官女・禿を従え、先帝車に乗ってパレードするものだ。

途中、伊崎町、グリーンモール、豊前田商店街、唐戸商店街の四方所では外八文字を披露する。外八文字とは、踏み出す足のつま先をまず内側に向けた後、外側に向けて足を運ぶことで、遊女が道中するときの歩き方である。一方、上臈参拝は、五人の太夫が赤間神宮の境内に設けられた天橋を渡り、本殿に参拝する行事である。赤間神宮には安徳帝を慰めるために竜宮城をイメージした水天門が作られており、天橋は水天門と本殿を結ぶために先帝祭

の時にだけ架けられる橋である。現在では、遊女の時代の名残をとめているため、華やかな太夫が目まぶしがちである。しかし、道中の行列順や参拝の所作にはかつての伝統が受け継がれている。

道中のスタートは九時半で、参拝が終わるのは十五時である。その間、太夫は二十キログラム以上になる衣装をまとい、外八文字も披露しなければならぬ。そのため、一九六七（昭和四十二）年からは下関舞踊協会の協力を得て、日本舞踊などの経験者に太夫たちの役を演じてもらっている。

「その意味では市民は鑑賞者ですが、地元ならではの伝統芸能ですから、市民の関心は非常に高いです。一方で、衣装の維持などには苦慮していますが、多くの皆さんの協力を得て、これからも盛り上げていきたいです」と、下関観光コンベンション協会の近藤洋平理事は語っている。関心の高さを示すように、しものせき海峡まつりには毎年三十八万人の観客が集まる。帝をしのび、美しく高貴な先帝祭は、海峡の悲哀の歴史を思い浮かべながら、多くの市民の心に受け継がれているようだ。

若者たちの地域づくり 2

限界集落で 持続可能な 地域運営に挑む 「ちいき活勢会」

《広島県庄原市》



慣れない手付きでも、一生懸命に田植えに励むメンバーたち

島根県の邑南・飯南の両町に接する広島県三次市作木町岡三淵は、周囲を標高700メートル前後の山々に囲まれた集落である。1960（昭和35）年の国勢調査では人口は302人であったが、2005（平成17）年の国勢調査では28人にまで減少している。しかも、65歳以上の高齢化率は2005年時点で82.1%である。

人口の50%以上が65歳以上の高齢者で占められる集落を「限界集落」と呼んでいるが、その定義付けからすれば、岡三淵はまさに「先端的な限界集落」である。この岡三淵で地元の人たちと一緒に持続可能な地域運営に挑戦しているのが、県立広島大学庄原キャンパスの学生たちが構成する「ちいき活勢会」である。



地域の人たちが観客となる「泥んこ相撲」

「島根県中山間地域研究センターが岡三淵で行っている調査研究に参画したのがきっかけで設立しました。会では、単なるボランティア活動とは一線を画し、地域運営を通じて、地元の人たちはもちろん、自分たち学生にも地域研究に役立つというメリットがある活動を目指しています」

こう語るのは大学院で定住促進を研究しながら会長を務めている小池拓司さんである。ちいき活勢会は、活動内

容が日常の支援、イベント、商品開発など多岐にわたるため、学生や専門家、興味がある人を呼び込み、自由に参画してもらう独自のスタイルをとっている。そのため正式な構成員は小池会長と会計担当の樋口和久さん（大学院生）の2人とし、柔軟な活動を可能にしている。

ちいき活勢会が常に心がけているのは、長期的な視点で、しかも細く長く活動することだ。「日本全体を人間の身体に例えると、都市は大動脈で、過疎地域は毛細血管です。しかし、毛細血管に栄養がいなくなると、血管そのものが破壊されます。それを防ぐためには、時間がかかって毛細血管をマッサージして、血流を良くすることが必要です。会はその役割を担いたいと考えています」と、小池さん。一過性のイベントではなく、じっくり地域の人たちと話し合い、活動することをモットーとしているのだ。実際、昨年度は岡三淵に63回も足を運び、作業や聞き取り調査などを行っている。

しかも、その活動内容も工夫されている。岡三淵の多くの人たちは高齢者であるため、学生が行う活動では過度に手伝いやもてなしをしがちである。しかし、そのためにイベント疲れを起すケースも多い。そこで、イベントにしても「泥んこ相撲」のように地域の人たちが観客として参画できるようにしているのだ。このことを小池さんは「参画が、死角になれば、不合格」という川柳にしているが、地域の人たちとの細くて長い協働を目指す会ならではの「3・4・5カクの法則」だ。

こうした地域活動は県立広島大学でも高く評価され、2009年度の学生表彰も受賞している。



技術者には最後までやり遂げる気力が大切です

コアテック株式会社 社長 須増仁志 《岡山県総社市》

十二時過ぎから始まる 職場の「打ち上げ」

時計の針は新しい日を刻み始めていた。シーンと静まり返った事務所では、仲間たちが一心不乱に設計図に向かっている。いつものこととはいえ、長時間にわたる設計作業は大きな疲れをもたらしているはずだ。それでも、働き盛りの仲間たちの目は輝いていた。エンジニアという自負が精神的な支えとなっていたのだ。

しかし、すでに夜の十二時を過ぎ、明日も忙しいスケジュールが待っている。「そろそろ切り上げようや」。そう語りかけると、仲間たちの視線が斉に向けられる。すぐに笑顔と明るい話し声が事務所に広がった。それまでの緊張した空気がうそのように、事務所内はくつろぎの空間へと変わった。

小さな部品や書類などで埋め尽くされた机の下に手を差し伸べると、そこには一升瓶があった。心得たもので、一升瓶を取り出した時には作業テーブルには人数分の湯飲み茶わんがそろえられていた。酒を酌み交わしながらでも、仲間たちは仕事のことばかり口にしてた。「あそこはこうすればもう少しスムーズに動くんじゃないかな」「思い切った発想を変えてみようや」。交わされるのは、いつも前向きな話だった。それを聞きながら、

企業家はいい仲間たちと一緒に仕事ができる喜びをかみしめていた。

「机の下に一升瓶を隠し持つてるなんて、今では考えられないことすなあ。で、事務所で飲んだ後は、開店している店で延長戦です。そうすると、もう深夜ですから、仲間と一緒に事務所に泊まり込みです。そんな日が毎日のように続くんですから、むちゃくちゃですわ。よく体がもつたと思いますよ」。

そう語る中、企業家は約四十年前の日々が脳裏に浮かんできたかのように視線を上げた。その表情は満足感に満ちていた。岡山県総社市のコアテック株式会社の須増仁志社長（73歳）である。

高校、大学と一貫して ものづくりを目指す

須増社長は一九三六（昭和十一）年に岡山県倉敷市に生まれた。中学校を卒業すると、地元の工業高校、さらに大阪の工業大学に進学した。高校、大学とも機械科を選んだ。将来はものづくりをしたいという思いからだった。

敗戦によって壊滅的狀態となった日本経済の大きな転換点は一九五〇（昭和二十五）年に始まった朝鮮戦争である。これによって、在日米軍などから大量の物資やサービスが発注された。いわゆる朝鮮特需だ。

朝鮮特需は物資やサービスの発注だけでなく、工場生産にも大きな転換をもたらした。米国で培われた品質管理や工程管理を日本の工場に導入し、効率的な量産体制を構築する契機となったのだ。その意味で、朝鮮特需は戦後の高度経済成長の礎といえる。

こつした大きな転換期を迎えて、日本は「ものづくり立国」への道を模索するようになった。須増社長がものづくりへの思いを強めていったのも、そうした時代の「空気」が影響していたともいえる。大学を卒業すると、須増社長は岡山県の農機具メーカーに就職した。古くから農業県であった岡山県では、大正時代から数多くの農機具が開発・生産され、戦前には全国の耕運機の約三割を生産するまでに成長していた。

須増社長は機械設計などを担当していたが、会社が大手農機具メーカーの子会社になったのを契機に退職した。子会社化に伴って大阪勤務を命じられたのだが、生まれ故郷の岡山を離れたくなかったのだ。

設計だけでなく エンジニアリングを志向

退職した須増社長が再就職したのは財団法人岡山地方発明センターである。発明センターは科学技術の向上と産業の

profile

須増仁志 すます・ひとし

1936年岡山県倉敷市生まれ。大学を卒業後、農機具メーカーを経て、67年に財団法人岡山地方発明センターに入社。72年に退職し、株式会社機器開発工業（現在のコアテック株式会社）を設立し、88年に社長に就任。コアテックは、資本金1億6,700万円、従業員数約240人、売上高56億円である。

文：城市 創（島根県益田市出身） 写真：林田 悟（岡山市在住）



市郊外の企業用地にある本社・工場（写真提供：コアテック）



主力製品のひとつとなっているリークテスター

発展を支えるために発明の実施を促進する組織で、戦後、全国に六カ所設置された。その一つが一九六一（昭和三十六）年に設立された岡山地方発明センターで、理事長は岡山県知事であった。

発明センターの事業部門に配属された須増社長は、機械設計の能力をフルに発揮し、金型や省力化機械などを開発していた。しかし、そこには大きな問題があった。事業部門でありながら、なかなか売上が伸びなかったのだ。

「財団法人ですから多くの企業と付き合えば生まれるのですが、その一方で、半官半民だから安くて当たり前と思われる、なかなかビジネスが成立しないのです。と同時に、機械設計といったソフトに対する価値認識が低いということも影響しましたね。そこで設計だけでなく、エンジニアリングを志向しようと思いついたのです。」

こうして須増社長は発明センターの同僚十人と一緒に株式会社機器開発工業として独立した。一九七二（昭和四十七）年のことだ。

ラインの自動組立機を核に自動車産業に進出

「文字どおり、ゼロからのスタートでしたが、ひとつも怖くなかったですね。むしろ、これから自分たちの目指すものを実現

メーカーの仕事をする中で貴重な勉強になりましたし、技術力も飛躍的に向上しました」

一九八九（平成元）年、機器開発工業は社名をコア（核）とテクノロジ（技術）を掛け合わせた「コアテック株式会社」に変更した。「メカトロクスを通じて産業社会の夢を実現する」ことを企業のミッションに掲げているように、これまで培ってきた技術力を生かして未来を創造しようという思いが込められている。

培った技術を核に、事業を横にも展開

コアテックの主力は、自動車のエンジンや変速機などの組立、品質管理を自動的に行う省力機器の開発・生産である。その分野においては、すべての国内自動車メーカーと取引関係を構築し、製品の優れた作業精度は世界に冠たる日本車の品質評価に大きく貢献している。

「私たちのものづくりの特長は、一品一品が異なる受注生産の設備であり、蓄積してきた独自の技術を製品の中に組み込んでいること、そして、お客さまと一緒に新しい設備を設計・開発してきたことです。これからは、こうした特長を生かして事業領域を拡大することが必要だと考えています。」

主に自動車関連で培ってきた技術を

現するんだと、気持ちが高まっています」

資本金五百万円の機器開発工業はまず切削専用機を手掛け、その後は建設機械や農機具、食品製造機などさまざまな産業機械の組立機を受注するようになった。

そうした中で、一九七六（昭和五十一年）年には、その後主力製品のひとつとなるリークテスターを開発した。これは、シール技術を活用して自動車のエンジンの潤滑油や冷却水の漏れを検出する装置である。

高度経済成長を背景に事業領域を拡大する中で、転換点となったのは農機具でもライン生産方式が採用されるようになったことだ。ライン生産方式とは、作業工程や作業員の配置をライン化し、ベルトコンベアで流れてくる機械に部品を取り付ける生産方式である。それに伴って機器開発工業でもラインの自動組立機への受注が増加してきた。

その延長線上で新しい事業分野として成長してきたのが自動車だ。戦後、岡山県は農業県から工業県への移行を目指し、瀬戸内海に面した水島コンビナートには大手自動車メーカーも立地していた。機器開発工業は農機具のライン生産で培ってきた技術を生かして、大手自動車メーカーから自動組立機を受注する

「横に展開」し、自動車はもちろん医療福祉やエネルギーといった分野にも事業領域を拡大しようというのだ。しかし、横展開にはコアテックが持っていない技術が不可欠である。そこで積極的に取り組んでいるのが異業種交流や産学官連携である。

そうした取り組みの一つが人工関節置換手術支援ロボットの開発である。これは、ロボットによる関節を正確に切除し、人工関節を適切な位置に設置するもので、東京大学や岡山大学、岡山市のナカシンプラ株式会社などと共同で開発を進めている。

一方、エネルギー分野では、太陽光発電や小型風力発電に加えて、シャイロ式



事業の核となる設計部門では多くの技術者が作業に専念している。

ようになった。

「最初のころは、同業者から部品メーカーとして自動車メーカーの傘下に入れば良いじゃないかとも言われました。しかし、仲間みんな、人に値段をつけられないのは嫌だ、自分で値段をつけたいという思いを持っていましたから、傘下に入るなんて全く考えませんでした」

国内のすべての自動車メーカーから受注

地元自動車メーカーの仕事を着実にこなし本社からも高い評価を得ることも、機器開発工業は他の自動車メーカーへもマーケットを拡大していった。といっても、すぐに採用されることは考えなかったし、自動車メーカーも新参の企業に生産ラインを任せようとはしなかった。

そこで考えたのは、まず予備のラインに自動組立機を導入してもらい、補助的な役割をきちんと果たせることを評価してもらったことだ。それによって自動車メーカーから高い信用を得るとともに、少しずつ自動組立機を受注を拡大していった。現在では、世界最高水準の品質を誇る国内自動車業界にあって、すべての自動車メーカーから自動組立機を受注するまでになった。

「それには十数年の歳月を要しました。しかし、世界でもトップクラスの自動車

波力発電の研究にも取り組んでいる。これは、フライホイールという回転体を使って波のエネルギーを電気エネルギーに変換して発電するもので、神戸大学や鳥取大学との産学官連携で展開している。

投げ出さなければ何でもできる

「新しい事業は製品化するまでに多くの時間と資金を必要とします。しかし、ものづくりには、失敗しても最後までやり遂げる気力が大切です。これまでも、受注した仕事はどんなに難しくても必ずやり遂げてきました。それでこそ信用を勝ち得たのです。投げ出さなければ何でもできる。それを信念にチャレンジし続けますよ」

こう語ると、須増社長は身を乗り出した。百年に一度という世界的な経済危機は日本のほとんどの企業に大きな打撃を与えた。それは「コアテックにおいても同じである。しかし、厳しい状況を切り開けるのは自分たちの力だけだ。

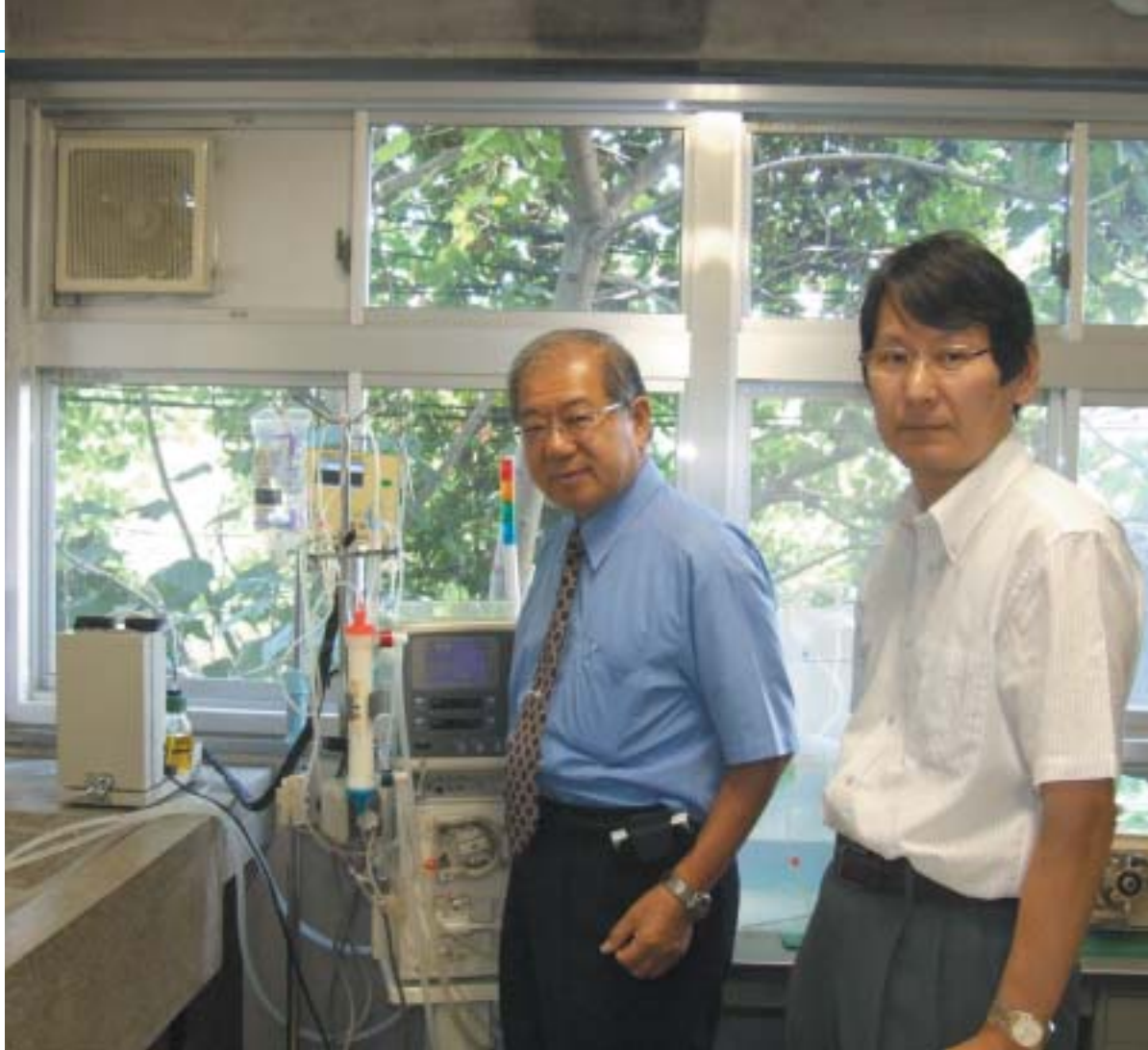
須増社長の顔からはその決意が伝わってきた。その奥では、「自分で開発した製品には自分で値段をつける」という技術者魂が四十年前と同じように燃え上がっていた。

その企業家を優しく抱くように、吉備の山々は一段と緑を増しているようだ。

血液透析患者さんの負担を 軽減する尿素モニター

〈岡山県〉

患者さんに多くの身体的な負担を強いる血液透析。負担を軽減するためにスタートした研究開発は、大学のシーズと企業のニーズなどをマッチさせながら、画期的な尿素モニターの開発へと着実に進んでいる。



尿素モニターを開発した中川教授（左）と尾崎准教授（右）

患者さんに大きな負担を 強いる血液透析

腎臓は尿を生成することで血液をきれいにしているが、何らかの原因で機能が低下し回復しなくなった状態を慢性腎不全という。慢性腎不全になると、多くの場合、生命を維持するために人工透析を行わざるを得なくなる。

人工透析には血液透析と腹膜透析があり、一般的に行われているのは血液透析である。血液透析とは、人工腎臓と呼ばれるダイアライザー（人工透析器）の装置に体内の血液を送り、血液の中の老廃物や余分な水分を取り除き、血液をきれいにして体内に戻すものだ。

約三十年前までは腎不全になると尿毒症で死ぬしかなかったが、この血液透析の発明によって腎臓の機能が低下しても寿命を全うすることができるようになった。とはいえ、四時間にわたる血液透析を週に三回以上行う治療は苦しく、患者さんの負担をできるだけ軽くしたいというのが医療現場の声だった。

化学発光を活用して 尿素の量を計測

さらに、人工透析装置にも大きな課題として世界初の化学発光による尿素モニターの実用化を目指した開発研究が産学官の連携でスタートしたのだ。

確かに試作機は完成していたが、それを実用機器に仕上げるためには測定精度のさらなる向上や小型化、低コスト化といった課題があった。特に、大きな課題となったのは透析液廃液と試薬の混合だった。

「微弱な化学発光を可視するモニター装置を組み立てたのですが、廃液と試薬が均一に混合できていないために、発光反応が反応容器のさまざまな場所ですらに生じていたのです」と、中川教授は振り返る。そこでひらめいたのが可変容量式反応器だった。

一定体積の反応容器に入った透析液廃液に試薬を入れても、瞬時に均一化する事は困難である。しかし、シリンジ（注射器）のような容積の変化する容器に少量の透析液溶液を入れた後、



尿素モニターでは化学発光で尿素の量を測定する。（写真提供：尾崎准教授）

試薬を一気に吸い込めば瞬時に均一化する。このような可変容量式反応器を採用することで、高精度の測

題があった。透析中にどれだけ老廃物を取り除いているかを効率的に測定することができないのだ。確かに、酵素法によって血液中の尿素の量を測定する方法もあるが、結果が出るまでに約九十分間もかかってしまうのである。しかし、除去した尿素の量を測定できれば、血液透析の時間を短縮し、患者さんの負担を軽減することもできる。

「そこで考えたのが、除去した尿素を含んだ透析液廃液の中の尿素の量を計測することでした。こう語るのは岡山理科大学理学部応用物理学科の尾崎眞啓准教授である。尾崎准教授は長年にわたって医療機関で臨床検査などを行ってきた臨床検査技師で、理工学と医療との「コラボレーション」を重視する大学の考えから応用物理学科に招かれ、現在は応用物理学科で医用科学を研究している。

透析液廃液中の尿素の量を計測するといっても、廃液はさまざまな老廃物を含んでおり、尿素の量を安定的かつ長時間測定することが必要だ。そこで尾崎准教授が相談したのが同じ応用物理学科の中川益生教授だった。中川教授は化学物質を測定するセンサーの研究者だった。こうして二人の共同研究がスタートした。今からほぼ三年前のことだ。

患者さんの体質に応じた 血液透析が可能に

こうして完成した尿素モニターは、シリンジに透析液廃液を注入した後、容器内の試薬を急速に注入すると瞬時に混合し、化学発光した光を光電子増倍管で測定するものである。最小計測時間はわずか四十五秒で、一定間隔で連続測定すれば排出された尿素の量も測定できる。

「本来、透析時間は体質などによって患者さんごとに異なるものです。この尿素モニターを使えば、患者さんの透析時間を過不足なく算出できますし、結果的に患者さんのQOL（クオリティ・オブ・ライフ）の改善にもつながります」と、尾崎准教授は尿素モニターの価値を説明する。さらに中川教授は今回の研究開発を振り返りながら、「企業のニーズと大学のシーズ、さらには行政の目標がうまくかみ合うことが産学官連携のポイントではないでしょうか」と言葉を続けた。

現在、日本で血液透析を必要とする患者さんは約二十九万人である。岡山県の産学官連携で誕生した尿素モニターがもたらした多くの患者さんに希望を与え、



患者さんの横に設置された人工透析装置。その右下にあるのが尿素モニター（写真提供：尾崎准教授）

試行錯誤の末に二人がたどり着いた結論は、尿素を含む廃液と次亜ハロゲン酸イオンを含む試薬との反応による化学発光を利用する方法だった。尿素は酸化剤と反応して発光する性質があり、その光の強さを計測して尿素の量を測定しようと考えたのだ。しかも、溶液から離れた場所に設置した光センサーで化学発光を計測すれば、汚染の影響もなかった。

実用化を目指して 産学官連携がスタート

こうして、世界初となる化学発光による尿素モニターが試作された。岡山産業振興財団の岡山ティー・エル・オーのサポートを受けて国内外の特許を出願するとともに、研究会や学会で発表された。その発表内容に強い関心を持ったのが、岡山市の協和ファインテック株式会社だった。協和ファインテックは国内の大手医療機器メーカーに人工透析装置をOEM供給（相手先ブランド供給）している企業で、透析装置の高付加価値化の一環として尿素モニターに注目したのだ。協和ファインテックは岡山ティー・エル・オーに技術移転の申請を行い、二〇〇七年（平成十九）年には岡山ティー・エル・オーを介して岡山理科大学から協和ファインテックに技術移転がなされた。こう

新しいビジネスモデルで ハンドバッグ市場を開拓するバルコス

〈鳥取県倉吉市〉

女性たちのファッションを彩るハンドバッグ。鳥取県の地方都市を拠点とするバルコスは、世界をフィールドにしながら、独自のビジネスモデルでハンドバッグ市場を開拓している。

高付加価値化を目指す 流通業の挑戦

江戸・明治時代の白壁土蔵群が残る鳥取県倉吉市は人口約五万一千人の地方都市である。その倉吉市でハンドバッグを中心にファッション関連商品の企画・販売を手掛け、国内外で市場を拡大しているのが株式会社バルコスだ。

バルコスの設立は一九九一年（平成三年）である。設立者の山本敬社社長は、東京で雑誌カメフラムとして活躍していたが、何か新しい仕事をしたいと考え、倉吉市で母親が営んでいた化粧品やハンドバッグなどの小売業を継いだ。そこで考えたのは高付加価値化だ。これまで携わってきた雑誌でも、ただの一枚の紙が、広告ページにすることで何百万円にもなる。こつした高付加価値化を新しい分野で実現したいと考えたのだ。

そこで着目したのが比較的大手メーカーの少なかったハンドバッグだ。とて「しかし、単一商品だけでは売り場を拡大できません。売上高にも限界があります。そこで企画したのがセレクトショップでした」と、山本社長。ヒカドだけでなく自社ブランドもそろえて生活感豊かな空間を百貨店の中に創出し、より多くのお客さまを確保しようと考えたのだ。ドイツ語で部屋を意味する「ラウム（ラウム）」と名付けたセレクトショップは、お客さまだけでなく百貨店からも支持され、バルコスは着実に店舗数を拡大していった。その一方で、失敗もあった。順調な成長に気を良くしてファッションビルなどにも店舗を展開したところ、圧倒的に力が強いアパレル業界との競争に巻き込まれて売上が伸びず、撤退を余儀なくされたのだ。

「その時に学んだのは、自分たちの事業領域をより明確にし、そこに力を集中することの大切さです」と、山本社長は当時を振り返った。

日本初となる 国際見本市への出展

事業領域をより明確にする中で、バルコスが目指したのはイタリア・フィレンツェへの進出だ。市場を拡大するために多額の広告宣伝費を投入することは会社の規模からしても無理だ。それならば世界が注目するフィレンツェに進出する

も、資金力などから当時主流だった海外メーカーのライセンス販売などはできなかった。そのため、へしゃわこ（はしゃわこ）類を素材とするハンドバッグを問屋から仕入れ、小売店に卸していった。世界的なブランドは無理でも、素材そのもので商品価値をアピールしようと考えたのだ。「同時に、倉吉を拠点にするなら流通しにくいと考えたのです。土地代も安いし、インフラや物流もある程度整備されている。このメリットを生かせば、倉吉を拠点にビジネスを展開できると判断しました」と、山本社長。こつしてバルコスは少しずつ社員を増やしながら、全国に爬虫類のハンドバッグを卸していった。また、東京などで製作されたハンドバッグにバルコスのブランドを付けて、市場を開拓していった。

ブランドを中心にセレクト ショップで店舗数を拡大

バルコスに転機が訪れたのは一九九七年（平成九年）年だった。取引先の紹介で世間で事業を拡大しようと考えたのだ。そのためにファッション・ディレクターとして世界的に知られるアルベルト・オネスチ氏とデザイン監修の契約を結び、イタリア支店も開設した。二〇〇七年（平成十九年）のことだ。

イタリアに進出するとともに、バルコスは毎年ミラノで開催されている国際皮革製品見本市「ミネル」へ自社ブランドを出展した。ミネルでは世界初の日本ブランドとして注目されたが、残念ながら海外のバイヤーからの注文はわずかしかなかった。それでも、日本のバイヤーからは高く評価され、日本のファッションではトップを走る百貨店との契約も成立した。その後、バルコスは毎年出展を続けており、二〇〇八年（平成二十年）年には出展メーカー約四百五十社の中から上位五社に与えられるデザインイメージ賞を受賞した。

世界を舞台とした 独自のビジネスモデル

このイタリア進出とともに、バルコスは今後の成長に向けた布石を打っていた。中国の広州にサンプル工場を建設したのだ。ハンドバッグの製作は、まず次のシーズンの流行を読み取って試作品を百貨店や有名セレクトショップなどに提案し、百貨店などの注文に応じて本格的な生産

界的にも有名なドイツブランドの「ピカード（PICARD）」と日本総代理店契約を締結したのだ。しかし、当初はなかなか売れなかった。そこで、一目でピカードと分かる水牛の革を使いながら、日本人の感性にフィットする商品を独自に開発し、百貨店を中心に店舗を拡大していった。

をスタートする。従って、いかに充実した試作品を提案できるかが事業のポイントとなる。

試作品とはいえ本物の革である。そのため、たくさん試作品を作るためには多品種少量の革の素材が不可欠となる。その点、広州は革の素材調達の世界的な拠点であり、いつでも素材を確保できる。そこに、アルベルト・オネスチ氏のアドバイスを受けた新作のデザインを投入すれば、多様な試作品を完成させることが可能なのだ。現在、広州のサンプル工場は関連子会社である生産管理会社が運営しており、日系企業としては最大規模となる月六百個の生産能力を持っている。

「試作品が決定すれば、世界各地の工場で本格的な生産に入ります。こつしたOEM（相手先ブランド）生産の受注は着実に増加しており、大きな事業基盤に成長しています。また、その一方で自社ブランドも開発し、百貨店だけでなく、独自性を生かしたファッション性の高い専門店「ラウム」を地方都市にも展開しています」と、山本社長は語っている。

常に商品の高付加価値化を追求してきたバルコスは、世界をフィールドとした独自のビジネスモデルで市場を、より開拓しようとしている。それは地方都市における新しい事業の姿ともいえる。



「ラウム」に並べられたバルコスの商品



地方都市に展開しているファッション性の高い専門店



世界的なファッション・ディレクターのアドバイスを受けたハンドバッグ

セレクトショップ：商品を店主の好みや個性によって品揃えし、生活のスタイルなどを全体的に提案する店舗

おいしい米を多くの人に届けたい。

その理想を仲間とともに追い求める高橋功一さん

島根県石見地域の米は本当においしい。それは、豊かな自然とともに、情熱をかけて米作りにいそむ人たちがいるからだ。それがどんなに素晴らしいことか、どれほど故郷の誇りとなることかを、米を通してみんなに伝えたい。そんな熱い思いを持って、ほんき村の高橋さんは今日も農村を走る。



profile

高橋功一 たかはしこういち

1952年島根県浜田市生まれ。大学を卒業後、地元の金融機関に勤め、34歳で実家の米穀店を継ぐ。2006年に農家とタイアップして米穀販売の株式会社ほんき村を設立し、代表取締役就任。ほんき村は「産直に近い流通」を目指し、一貫して自分たちの考えを主張し続け、新しい米流通の姿を追い求めている。

文：藤沢享乃（広島市在住） 写真：前田滋悦（広島県呉市在住）

生産者と販売者が タッグを組む

トンネルを抜けると雪国であった。川端康成の小説『雪国』のような光景が冬には広がるという島根県浜田市弥栄町で、「おいしさと安全」をテーマにした米作りに取り組んでいるのが弥栄町の農家と株式会社ほんき村の人々だ。その火つけ役となったのが、代表取締役の高橋功一さん（56歳）である。ほんき村の米は、農家から直接集荷し精米して、自らの手で販売する。つまり、生産者と販売者がタッグを組んで、本当においしい米、安心して食われる米を消費者に直接届ける仕組みだ。有機農法や地産地消などはすっかり定着した感があるが、十五年前にはほんき村構想ができたころは、常識では「ありえない」「ことごとく」という。

り販売するのといった目的が欠けていると感じたからだ。

生産者自身が誇れる米でなくては、三百六十五日苦労して米作りをする意味がない。単なる利益追求だけでは販売者は中間搾取者に成り下がってしまう。消費者が真に望む米を提供し、生産者も販売者も自らの仕事を誇れるし、堂々と付加価値を高めることができる気が付いたのだ。 「これまで紹介しただけでは、高橋さんは生産者の代表であり、米への理想が転じて販売業務まで自分の手で行おうとしている人といったイメージが浮かんでくるだろう。ところが、高橋さん自身は米穀店の社長である。金融くんだった高橋さんは、三十四歳の時に脱サラして実家の米穀店を継ぐことになった。その時、高橋さんの心を支配したのは前述のような違和感だった。そして、生産者も販売者も、ひいては消費者までもが喜びあえる「Win-Win」の関係が必ず構築できるはずだと考えたのである。 そのためには他の米穀店とは違う特色が必要である。どこに出しても誇れる米を手に入れた。その思いを胸に、まず理想の米を作ってくれる農家を探すが高橋さんの第一歩だった。

百軒の農家の人から 見つけた三人の仲間

「米の味はそれを育てる人によって決まります。そこで、百軒の農家の人に直接会って、どんなことをしているのかを聞くことから始めました。自分の理想を実現するには一緒にやってくれる仲間が必要だったので、」 そんな高橋さんが「この人たちなら」と見込んだのが、無農薬栽培を手掛ける藤井拓次郎さん、作った米の九割以上が最高ランクになるといふ米作りの達人の菊田喜好さん、農業問題に取り組み集落営農を実践している小松原峰雄さんの三人だった。彼らはそれぞれに自分のこだわりを持ち、実践している人である。

彼らなら信じられる。そして、一緒にやってみよう。高橋さんの心は決まった。三人にはすぐに、「あなたたちが作った米は全部私が買いたい」と話をもちかけた。しかも、掛け値なしで、自分ができる限り精一杯の高値をつけることも約束した。 しかし、年間十五トンから十六トンの米を、収穫する前から一粒残らず、しかもなるべく高値で買うという申し出に対して、三人は半信半疑だった。本当に全部の米を一軒の米穀店が買

上げてくれるのか、高値をつけてくれるのかといった不安もあった。

「しかし、私の本心は、一緒にやってくと決めた以上、私がサポートできることは私がやる。その分、これまで以上に米作りに専念してもらいたいという気持ちでした」と、高橋さんは当時を振り返る。 熱く語る高橋さんを見てると、こんな風に熱心に口説かれたら、たとえ半信半疑でもやってみようという気になってしまつたらうと推測できる。その熱意が三人の心を動かしたのも無理はない。

ところで、多くの農家から三人を選んだ理由だが、一言でいうなら、「うちががあった」からだそうだ。この米



夕暮れを迎えようとする弥栄町の田園風景

はどのように「どなたか」を目的として
どいつか思いで作っているかをきちんと
説明できるかどうかを決め手だ。」「自
分で説明できる人なら間違いはない」
と、いつが高橋さんの持論である。

ちなみに、二〇〇六（平成十八）年
八月に高橋さんが米穀店を「ほんき村」
として株式会社化した際、この三人は
役員となった。

石見の米は本当においしい

おいしい米を作るには、生産者の情
熱や知識、技術が必要だが、それだけ
では十分でなく、自然の助けがなけれ
ばできない。その点、山間地の弥栄町
は標高が高いため昼夜の寒暖差が大き
く、しかもおいしい米が育つ土壌にも
恵まれている。自然は豊かで空気は澄
み、野生のイノシシやキジが生息する
理想郷のような所である。

その反面、山間部なので広い土地を
確保することが難しく、平野部での
米作りに比べて苦勞も多い。しかし、
その苦勞こそが米の味を引き立てると
いう。

さらに、ほんき村では厳しい自主基
準を設けて自社ブランドの信用度を高
めている。五〇%以上農薬と化学肥料
を減らしたエコロジー栽培を実践し、
食味計で八〇点以上のA判定である

ことや玄米検査において一等米である
ことなどを基準としているのだ。さら
に、米の白さを表す白度計を活用して
米のうま味を削り過ぎないように精米に
おいても心遣いしている。

また、ブランド米の「稲の底力」は
弥栄産限定の「コシヒカリ」、もう一つ
ブランド米である「ほんき村」は石見
地域の「シビカリ」と、産地まで厳し
く限定している。

「ほんき村の自慢は管理にあると自負
しています。情熱を込めておいしい米
を作った。しかし、作り放しではせ
かくのおいしさが損なわれてしまっ
だから、ほんき村では、うま味の自主
検査のほか、精米機器や保管に一人倍
気をつかっているのです」と、高橋さん。
どんなにおいしい米でも、一番おいし
いのは新米の時で、その後、徐々にう
ま味が損なわれていく。しかしながら、
きちんとした管理を行えば、劣化を最
小限にでき、年中おいしい米を提供で



米のうま味を保つために一人倍気をつかった
空調設備付き倉庫

きるのである。そのため、浜田市の市
街地にあるほんき村の本店はかなりコ
ンパクトで、一見するとぶつうの小さな
米穀店にしか見えない。その代わり、
弥栄町に建つ精米施設や検査機器・空
調設備付き倉庫は立派なものだ。せ
かくのおいしさを守りたいという高橋
さんの気持ちの表れである。

地元でも愛されないものは 県外でも愛されない

現在、ほんき村の米は、飲食店や料
理人といったプロを中心に高い評価を得
ており、高橋さんは生産者の輪をさら
に広げて取扱高を増やす努力を続けて
いる。加えて、インターネットなどを通
じて個人のお客さまが直接買える仕組
みも充実させてきた。今後個人客へ
のアプローチを強化していきたいとい
う。その背景には、たくさんの人においし
い米を届けたいという思いもあるが、何
より自分たちが住んでいる地域の素晴
らしさをもうとよく知ってもらいたいと
いう気持ち強いからだ。

高橋さんは、「地元で愛されない商
品は、県外でも愛されない」という。
県からは、島根県特産として県外でも
大々的に宣伝してほしいという要望も
あったが、それよりもまず地元の消費
者を生産地に招待して、田んぼの中

おいしいむすびをほお張ってもらったり、
消費者の素直な意見を聞いたりして、
生産者と地元消費者の関係を強くし
たいと考えている。あるいは、値引き
をしないほんき村の商品だが、盆と正
月だけ、「帰省してきた家族に故郷の
おいしい米をたくさん食べさせてあげた
い」といった思いから、特別に地元ス
ーパーの値引きセールに参加する。

そのほか、ゆくゆくは、ほんき村の
米を生産地でむすびとして売り、その
場で食べてもらう、気に入れば目の前
の倉庫で精米したばかりの米を買って
帰れるような、消費者が喜ぶ「お米の
テーマパーク」を立ち上げたいという
アイディアもある。特に田んぼの魅力
を知らない子どもたちに、自然の素晴
しさ、米の本当のおいしさを伝えたい
そうだ。

美しい里山の風景の中で食べるむす
びは、きつと格別の味がするに違いない。



栽培圃（ほ）場の前で高橋さんの笑顔はより輝きを増した。

佳味彩々

12

からもち

山口県周防大島町

もちのぬこり感とサツマイモのホッ
コリした風味、程よい甘さが絶妙のハ
ランスで口の中に広がる、「かもち」
は、周防大島に伝わる手作りのおや
つである。

山口県東南部に位置する周防大島
は、瀬戸内海で三番目に大きな島。
全域が瀬戸内海国立公園に指定され、
温暖な気候を生かしたミカン栽培や
漁業が盛んだ。明治時代から多くの
海外移民を送り出した「移民の島」
としても知られ、八ヶ伊州カウアイ島
とは姉妹島縁組を結んでいる。近年
は島出身の民俗学者・宮本常一や作
詞家・星野哲郎の記念館がオープン
し、観光にも力を入れている。

そんな島の家庭で作られてきた、「か
もち」は、島でとれたサツマイモと
もちをゆでてつぶし混ぜ、砂糖を加
えて丸め、きな粉をまぶした郷土色
豊かな甘味だ。イモをかいて（混ぜて）
作ることから、「かもち」の名が付

いたといわれているが、米を十分に食
べられなかった時代、ヒヤアワとイモ
を合わせて作ったもちで空腹をしのい
だことから「介もち」と呼んだとい
う説もひっそり語り継がれている。

茶がゆが主食という家庭が多かつ
た大島では、食べ応えがあつて腹もち
のいい「かもち」は頼もしい代用食
だったに違いない。『宮本常一著作集
周防大島民俗誌』にも「かもち」
の文字は見られる。

「農作業の合間にも食べていましたね。
味は家それぞれで、現在九十歳を超
えた私の叔母は、丸めずに皿にだら
ーっと広げて出してくれていました」
と、かもちグループ代表の岡田純子
さん。

岡田さんは、最近ほとんど作ら
れなくなった「かもち」をおよそ
八年前から郷土料理加工研究会で復
活させ、観光施設で茶がゆ膳のデザ
ートとして提供していた。やがて二〇

〇一（平成十三）年に周防大島高
齢者モデル居住圏構想推進協議会が
実施した「新たな特産品づくりコン
ペ」で優秀特産品に選ばれ、二〇〇
四（平成十六）年からは週一回、道
の駅・サザンセトとついで販売するよ
うになった。

毎年十月下旬から翌年六月中旬の
日曜日に、高齢者中心の女性グル
ープが集まって手作りし、出来たてを
店頭に並べている。イモは特産の東和
金時をグループの畑で栽培して使い、
春に摘んだ「モギ入りのものも作る。
五個人入りパック三十五組が早い日には
正午までに売り切れるとか。

「年配の方は懐かしがって、ツーリン
グの若者たちは走りながらほお張る
から買っていかれます」

時代は変わっても、手軽でおいしい
エネルギー源は不滅。潮風の中、素
朴な味わいが島の高齢者たちのパワ
ーをも伝える。

文：村上郁子（山口県岩国市在住）





藩ものがたり 2

福山藩

《広島県福山市》

芦田川の河口に城郭と城下町を建設した福山藩は、大規模な上水道網や入り川の整備、新田開発、地場産業の振興など積極的な地域経営を進めた。それとともに実学を取り入れた人材育成も進め、それはやがて多くの企業人を輩出する「風土」を形成していった。



近世最後の本格的城郭である福山城

水野氏の経済政策

天下分け目の関ヶ原の戦い（一六〇〇年）の後、ほぼ現在の広島県域にあたる安芸・備後両国は秀吉子飼いの武将で東軍に味方した福島正則が領有するところとなった。しかし、正則は元和五（一六一九）年に広島城を無断修築した罪で改易となり、安芸及び備後北部・西部は浅野長晟が、備後南部（現在の福山市とその周辺）は水野勝成が新たに領有することとなり、ここに福山藩十萬石が誕生する。

勝成は芦田川の河口に新たな城郭と城下町を建設した。福山城は、武家諸法度で新規築城が禁止された中で例外的に認められた、近世最後の本格的城郭である。

勝成は若いころから数々の戦功を上げ猛将として知られていたが、一時期父の怒りを受けて勘当の身となり、放浪生活を送っていた。

中国地域の各地には勝成の放浪中の育は不振であった。譜代藩であるがゆえに幕府の朱子学中心の教学施策に従わざるを得なかつたためともいわれている。そこで、正弘は嘉永六（一八五三）年に江戸藩邸内に学問所を、翌年福山に文武総合の学館を建設し、ともに誠之館と名付け、実用の学を取り入れて藩内での積極的な人材育成を行うこととした。

誠之館では仕進法という教育制度が導入された。藩士の子弟が文武の相当の能力をつけて試験に合格すれば一定の俸禄・扶持米を支給して召し出すというもので、嫡子以外も対象にした。世襲制度を崩さずに教育の成果を上げていくという試みだったが、あくまでも封建制度内での改革であるために限界もあつたようである。正弘の多忙と早世も影響したのかもしれない。しかし、現在、福山市が数多くの企業家を輩出していることを考えれば、福山藩で培われてきた地域の「風土」が花開いているともいえる。

菅茶山と廉塾

その一方で、民間における私塾も各地で活発に教育活動を行っていたが、福山藩内で最も著名なのは神辺に菅茶山が設立した廉塾である。茶山は江戸後期の代表的漢詩人としても知られる人

伝説が残されており、そのため備後国の地の利にも明るかつたとされている。福山人入りの後は、放浪時の人脈を生かして人材登用を行った。

勝成は藩政においてもすぐれた治績を数多く残している。城下町の建設にあつては、江戸の神田上水に次ぐ規模を持つ上水道網を整備し、瀬戸内海から城まで入り川を引き入れるとともに大規模な新田開発や用水池を整えた。また、備後表（豊表）の生産や木綿栽培、塩田経営などを奨励し、寛永七（一六三〇）年には財政的裏付けのために、全国初ともいわれる藩札を発行している。備後表に関しては幕府献上品である献上表が幕府買い上げの御用表となり、備後表座という独自の買い上げ機構が設けられるようになっていった。

勝成は島原の乱（福山藩は九州の大名家以外で唯一参戦している）の後に隠居したが、その後も隠居料のほとんどを新田開発や用水路の整備に費やした。勝成の死後もその積極的な経営政策は基物である。

茶山は農業と酒造業を兼営する富裕な家に育つたが、病弱だつたため医者を目指し、明和三（一七六六）年に上京した。この際、安芸・竹原出身の頼春水と深い交友関係を結んでいる。六度にわたる京都遊学の後、神辺に帰って天明元（一七八一）年ごろに開いた黄葉夕陽村舎という私塾が廉塾の前身である。

茶山は藩からたびたび藩校に登用する意向を伝えられ、講釈したこともあつたが、官には仕えず生涯民間教育に専念した。また、教育の公共的性格を認識していたため、塾の私物化を避け、その永続を図るため、寛政八（一七九六）年に廉塾と塾田を藩に献上して、教育費などが支給される郷塾として認めてもらった。

茶山が塾の管理運営の方針を記した『菅太中存寄書』には、不行跡な行いをする塾生は退去すべきであり、それは茶山自身でも後継者でも同じだとしている。実際、文化六（一八〇九）年には頼春水の子である頼山陽が後継者として廉塾にやってきたが、山陽はさまざまな不行跡で茶山を悩ませた揚げ句、結局一年余りの滞在で立ち去っている。

なお、廉塾の建物は現在も神辺の地に残されており、歴史的な観光施設となっている。



神辺に残る廉塾の建物

監修：園尾 裕（福山市教育委員会文化課）
写真：平本勝美（福山市在中）



瀬戸内海と福山城を結んだ入り川

本的に踏襲され、藩成立当初は農民全体の七割以上であつた小作民はほぼいなくなり、この間石高は約三万石増加した。しかし、子孫にはあまり恵まれず、元禄十一（一六九八）年に五代目の勝岑がわずか一歳半で病没すると、嗣子断絶で改易となつた。一部の藩士や領民は水野家の存続を求めて籠城の気配を見せたが、家臣の説得により間もなくその動きは沈まつたといふ。

阿部正弘と藩校誠之館

水野氏の改易後、福山は一時天領となつたが、松平忠雅一代の領有を経て宝永七（一七一〇）年に阿部正邦が入封して、以後幕末まで阿部氏の治世が続くこととなる。

阿部氏は代々幕府の要職を務めたが、最も知られているのが日米和親条約締結の際に老中首座だつた阿部正弘であつた。正弘は二十代半ばにしてすでにその職にあり、身分の上下にかかわらず有能な人材を幕府の官吏として登用した。

福山藩では天明六（一七八六）年に藩校弘道館が設立されているが、その教

宗隣寺庭園

《山口県宇部市》

七七七（宝亀八）年に、唐より来朝した為光（威光）和尚によって創建された松江普濟寺の庭園である。その後、普濟寺は、戦国時代には荒廢の憂き目にもあうが、一六七〇（寛文十）年に、宇部領主となった長州藩永代家老・福原氏十五代広俊が父元俊の冥福を祈るため宗隣寺として再興した。臨濟宗東福寺派の寺で、中国観音靈場第十八番札所となっている。

庭園は本堂の北側にある。築山と池を組み合わせた庭で、「龍心庭」と呼ばれている。禅の神髄を説いているといわれる須弥山式禅宗庭園で、奇岩や巨岩を用いず庭園全体に閑寂な趣をたたえている。

南向きの丘陵上部には中心石が立てられ、その下に池に落ちるように枯滝が組まれている。池中には八つの「夜泊石」が二列に配置され、全体の均整をとるとともに、立体感を添えている。

小石を敷いて造られた浅瀬は「干潟様」と呼ばれ、池の水位によって洲浜が見え隠れして潮の干満を表現している。この

干潟は平安時代の古典『作庭記』にも記されている作庭技術によるもので、現存するのは若手県平泉の毛越寺とこの宗隣寺のみといわれており、庭園史上において貴重な遺構である。

池の地割りなどに南北朝時代の作とされる京都の知恩院や南禅寺の庭園に通じるところがあり、この庭園の原型が造られたのも南北朝時代のことと考えられている。寺を再興した際、この庭園もかつての普濟寺の池庭を改修・整備したものとされており、山口県内では最も古い庭園とされている。

一九八三（昭和五十八）年には国の名勝に指定された。



太陽の光と木々の緑に彩られた龍心庭



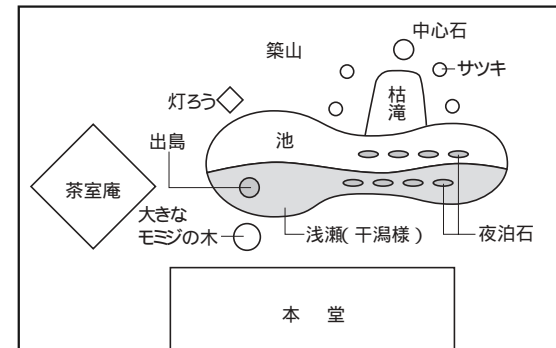
池に並ぶ夜泊石の一部



築山には中心石と枯滝が据えられている。



龍心庭はこの本堂の裏手にある。



配置図

向上寺三重塔

《広島県尾道市》



瀬戸内海を望む三重塔

瀬戸内海を見下ろすように瀬戸田（生口島）に建つ、朱塗りの三重塔である。

向上寺は室町時代初期、一四〇三（応永十）年に建立され、三重塔は一四三二（永享四）年に建てられた。塔の特徴は、組物に入れられた装飾彫刻の見事さである。ひじ木の先端には植物を抽象化した若葉という図案が施され、四隅の親柱の飾り付けは珍しい逆蓮華（ハスの花を逆にかぶせた形）になっている。

この島で生まれ育った日本画家の平山郁夫氏は子どものころから三重塔を描いていたという。



見事な装飾彫刻が施された塔